中曽根北遺跡

緊急発掘調査報告書

1980

箕輪町教育委員会

中曽根北遺跡

1980

箕輪町教育委員会

序　　文

県営畑地帯総合土地改良事業が昭和54年度事業として当町中曽根地区に実施されることとなったが、実施地区内には遺跡包蔵地が含まれることから、南信土地改良事務所の深いご理解の下に緊急発掘が行われることになったのである。

当町は、先史原史時代の遺跡に富み、百七十ヶ所にものぼる遺跡包蔵地が確認されているが、そのうち経ヶ岳山麓に沿って点在する包蔵地はその四分の一にものぼり、主として縄文時代のそれが大部分であり、中には早期の遺跡も含まれている。さらに、古墳時代末期の小円墳もあることから、延喜の古道の東山道の通過地点でもあり、まだ比定されない深沢の駅址と関連させて考えるとき、この中曽根北遺跡の発掘には興味深々たるものがあったわけである。

しかし、発掘の結果は二つの住居址、それも平安期と推定されるものの発掘に終ったが、曽根と稱される地名が石まじりの瘦地を指すことと、推定される深沢の駅址との関連から、何らかの推理を加えて見るのも、あながち荒唐無稽ではないようにも思われる。

終りに本調査に当られた林団長と調査員の諸君、さらに協力された地元中曽根区の皆さんに深甚なる敬意を表する次第である。

箕輪町教育長　　河　手　貞　則

凡　　例

1. この調査は、箕輪町中曽根地籍の県営畑地帯総合土地改良事業に伴うものであるため、事業着工前に調査を完了する必要上緊急の記録保存事業とした。
2. 報告書は図版を主体とし、文章記述は簡略とした。
3. 遺構の縮尺はそれぞれの図に示してある。
4. 本報告書の執筆者および図版作製者は次のとおりである。

　○本文執筆者　林　茂樹　　柴　登巳夫　　福沢幸一

　○図版製作者　土器・石器の実測、土器拓影。

　　藤森美枝　　竹入洋子　　福沢幸一

　　市川　隆　　木下　久　　柴　登巳夫

　○写真撮影　柴　登巳夫

5. 本報告書の編集は主として箕輪町教育委員会があたった。

目　　次

序　　文

凡　　例

目　　次

挿図目次

第Ⅰ章　　遺跡の立地 …… 1

第１節　位　置 …… 1 ～ 2

第２節　自然環境 …… 2

第Ⅱ章　　発掘調査の経過 …… 3 ～ 7

第１節　発掘調査に至るまで …… 3 ～ 4

第２節　歴史的環境 …… 5 ～ 7

第Ⅲ章　　発掘調査の結果 …… 8 ～18

第１節　調査結果の概要 …… 8 ～ 9

第２節　遺　構 ……10～16

第３節　遺　物 ……17

第４節　周辺遺跡出土石器 ……18～22

第Ⅳ章　　まとめ ……23～24

挿　図　目　次

第１図　位置図……(1)
第２図　遺跡周辺の地形……(2)
第３図　周辺遺跡分布図……(6)
第４図　地形図及び発掘区域図……(8)
第５図　遺構全測図……(9)
第６図　Ａ地区遺構図……(10)
第７図　第１号建造物址……(11)
第８図　第２号建造物址……(12)
第９図　第２号建造物址地層図……(13)
第10図　第１号土拡実測図……(13)
第11図　第１号土拡地層図……(14)
第12図　第２号土拡実測図……(14)
第13図　第２号土拡地層図……(14)
第14図　Ｂ地区発掘調査図……(15)
第15図　Ｂ地区地層断面図……(16)
第16図　土器拓影……(17)
第17図　石器実測図……(17)
第18図　周辺遺跡出土石器実測図……(18)
第19図　周辺遺跡出土石器実測図……(19)
第20図　周辺遺跡出土石器実測図……(20)
第21図　周辺遺跡出土石器実測図……(21)

第Ⅰ章　遺跡の立地

第1節　位　　置

中曽根北遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字中曽根14901—2、14901—4番地に所在する。帯無川と大泉川によって形成された扇状地上にあり、国鉄飯田線木下駅より西方へ約3㎞の地点にある。遺跡の南には中曽根部落があり、標高は820m前後を示している。遺跡の北側には一の宮部落が広がり、帯無川に沿って大遺跡が続いている。

第Ⅰ図　位　　置　　図

第2節　自然環境

箕輪町の地形は天竜川によって二分されているため川西を竜西、川東を竜東と呼んでいる。竜西地区は経ヶ岳（2296.3ｍ）を主峰に、黒沢山（2126.8ｍ）、桑沢山（1538.3ｍ）と続く山々を背にして、そこに源を発した大泉川、帯無川、深沢川等によって複合扇状地形が形成されている。これ等の運搬堆積によってでき上がった扇状地は東方に向って緩かな傾斜をなしている。本遺跡は扇央部やや上方に位置し、大泉川と帯無川のほぼ中央にある。この扇状地の頂部・扇央部は流水の地下への浸透がはげしく帯無川は中流やや上ですべての流水が浸透している。これ等は伏流水となって洪積台地の下を流れ、扇端部の段丘崖下に豊かな湧水となって出ている。年間の水温も一定で15度前後である。今日においても水道水として重要な水源となっている。遺跡南には西方の山より流下する樋の木川が部落の中央を流れている。遺跡から帯無川までは約1㎞離れており、生活用水として利用するには離れすぎている。その点樋の木川までは約100ｍなのでこの流水を使用したものと思うが、水量が少なく、はたして当時から現在の位置に流れていたかは疑問である。この中曽根部落は水が少なく、水田の水を確保するために江戸時代末期頃まで、部落内いたるところに横井戸を掘り、現在もその井戸水によって田を耕作しているところがある。このように一帯は水便が悪いため、古代よりあまり居住性には富んでいなかったのであろう。

第2図　遺跡周辺の地形

第II章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまで

本地区は箕輪町中曽根部落の北に広がる畑作地帯である。箕輪町はもとより、天竜川右岸の竜西に広く土地改良事業の計画がなされ、この地域も県営畑地帯総合土地改良第五工区に入っている。この事業の実施に伴ない本遺跡が破壊されるおそれがあるため、緊急発掘調査を行ない記録保存を行なうよう県教育委員会から指導があった。県教育委員会、南信土地改良事務所、箕輪町教育委員会協議のうえ、発掘地点・調査時期等決定を行なった。以後発掘調査の計画を進め数回にわたり調査予定地区及び周辺の踏査を行なう。昭和54年９月に入り調査団を組織し、日本考古学協会々員の林茂樹氏を調査団長にお願いし、10月下旬より記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなったのである。

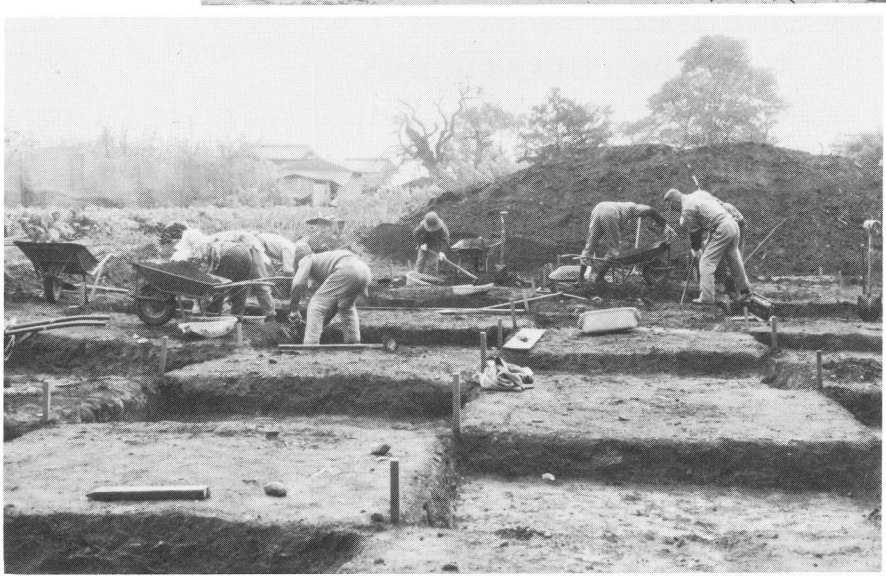
1.　発掘調査団

団　長	林　茂樹	日本考古学協会々員
調査主任	柴　登巳夫	
調査員	福沢幸一	
〃	藤森美枝	
〃	木下久	
参　与	馬場昭一	箕輪町教育委員会教育委員長
	原茂人	〃　委員長職務代理
	桑沢良平	〃　教育委員
	戸田宗十	〃
	春日琢爾	箕輪町文化財調査委員会委員長
	樋口彦雄	箕輪町文化財調査委員
	星野和美	〃
	矢沢喬治	〃
	市川修三	〃
	小川守人	〃
	堀口貞幸	〃
	上田晴生	〃
	藤田寛人	〃
事務局	河手貞則	箕輪町教育委員会教育長
	丸山昭夫	〃　教育課長
	唐澤千洋	〃　社会教育係長

中　村　文　好　箕輪町教育委員会社会教育主事
柴　　登巳夫　箕輪町郷土博物館学芸員
竹　入　洋　子　　〃

2.　発掘調査の経過

調査地区が決定した後、調査員によって現地及び、周辺の表面採集を行なう。その結果灰釉陶器の採集が多かった。そのため調査によって遺構が検出されるならば、平安時代のものであろうと予想した。10月末に調査地区をブルトーザーによる排土を行なう。調査地区を二つに分け北側をＡ調査区、南側をＢ調査区とする。Ａ調査区に65グリット、Ｂ調査区に40グリット設定する。調査区全体を２ｍ方眼のグリット設定から開始し、Ａ調査区東側より始める。調査は晴天に恵まれ、地元中曽根区の皆さんの協力により順調に進められた。その結果、以後に記したような調査結果となった。



調　査　風　景

第2節　歴史的環境

箕輪町内は先史より近世に至る歴史上の遺跡に富み、遺跡の総数は170ヶ所を越し、伊那の平においても屈指の遺跡地帯を形成している。町内の遺跡は立地する条件により四類に分けて考えられている。

第一類　経ヶ岳山塊の山麓附近に立地する遺跡群。

第二類　天竜川西岸段丘上に列状に並ぶ遺跡群。

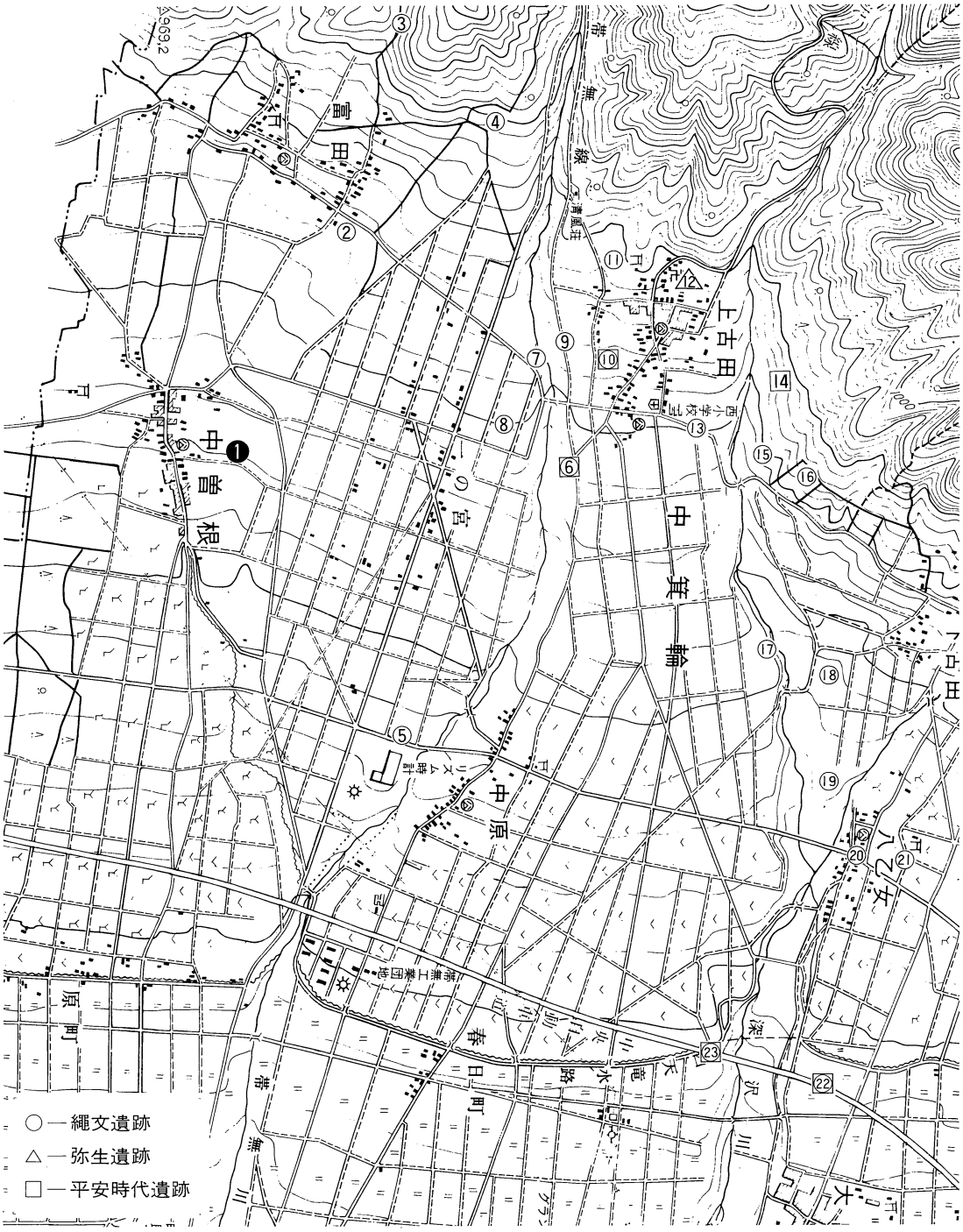
第三類　天竜川東岸の段丘上及び扇状台地に立地する遺跡群。

第四類　低位段丘（沖積段丘）の遺跡。

中曽根北遺跡は第一類に入る。第一類に入る遺跡は富田、中曽根、一の宮、上古田、下古田、長田、八乙女、中原等であるが、中でも富田、上古田、下古田が遺跡の数では多い。一類の中に入る遺跡は41ヶ所に上り、町全体の4分の1を占めており、ほとんどが縄文時代の遺跡である（注1）。本遺跡に最も接近し、第1類遺跡中最大と思われるのが一の宮遺跡で、過去における出土資料も豊富である。又、本遺跡の西方富田部落の樅ノ木山遺跡からは縄文時代早期押型文土器が出土している。現在のところでは第一類遺跡群において唯一の早期遺跡である。又、同部落の大久保遺跡からは黒耀石製の長さ6.5㎝のポイントも出土している。大久保遺跡は他にも数多くの出土遺物があり、今後十分注意しなければならない遺跡である。古墳時代になり、一の宮地籍に二基の円墳が造られている。共に古墳時代末期に造られた一連の小円墳である。一基は一の宮部落西方の山中にあり「岩屋古墳」と呼ばれている。中曽根部落の古老の話によると、昔は石室の中に出入りできて遊べたと話された。大正年代に石塔の建立のため台石として石室の一部が搬び出されたと伝えられる。そのため石室は原形を保ってはいないが一部その様子を見ることができる。他の一つは帯無川南の山中にあり「狐塚」と呼ばれている。これも大正年代初期に近郷の若い人々によって掘り返えされ現在はすり鉢状になっている。ここからは直刀が二振出土したと伝えられる。又、この一帯は「東山道」の通過地点並びに深沢の駅址の推定地の一つにもなっており歴史的に多くの問題を秘めた一帯である。

注1．総遺跡数41ヶ所中縄文時代の遺跡は34ヶ所、弥生時代の遺物を出土する遺跡3ヶ所、平安時代の遺物を出土する遺跡8ヶ所、古墳5基である。時期が重複する遺跡も含まれる。

注2．深沢の駅址について現在いくつかの推定位置が考えられており、それぞれに意味をもった説である。駅の中心を下古田に推定する説が有力とされている。（上伊那誌歴史扁第二節伊那の三駅P.331）。（市村咸人全集第一巻、延喜式所載の東山道の節P.497）。しかし駅址となれば40戸以上の集落を形成したといわれている以上、大きな生活址があって当然と考える。又、それに伴なう灰釉、須恵器が多量に出土する遺跡があるはずと考えたい。下古田地籍にかかる遺跡が少ないのが気になる。その点長田地籍にはこれ等の出土遺物はきわめて豊富である。一方天竜川沿いの段丘上をほぼ直線に通過し、現在の大出地籍に駅址を推定する説は考えられないものか。



❶ 中曽根北　②大久保　③樋の木沢　④岩屋古墳　⑤並木下　⑥五斗山　⑦狐塚古墳
⑧一の宮　⑨南原　⑩幸道　⑪山の田　⑫西久保　⑬円仏　⑭金原
⑮深沢北　⑯待屋　⑰オサキ　⑱十郎　⑲竜ヶ崎　⑳五輪　㉑祝神
㉒中道　㉓堂地

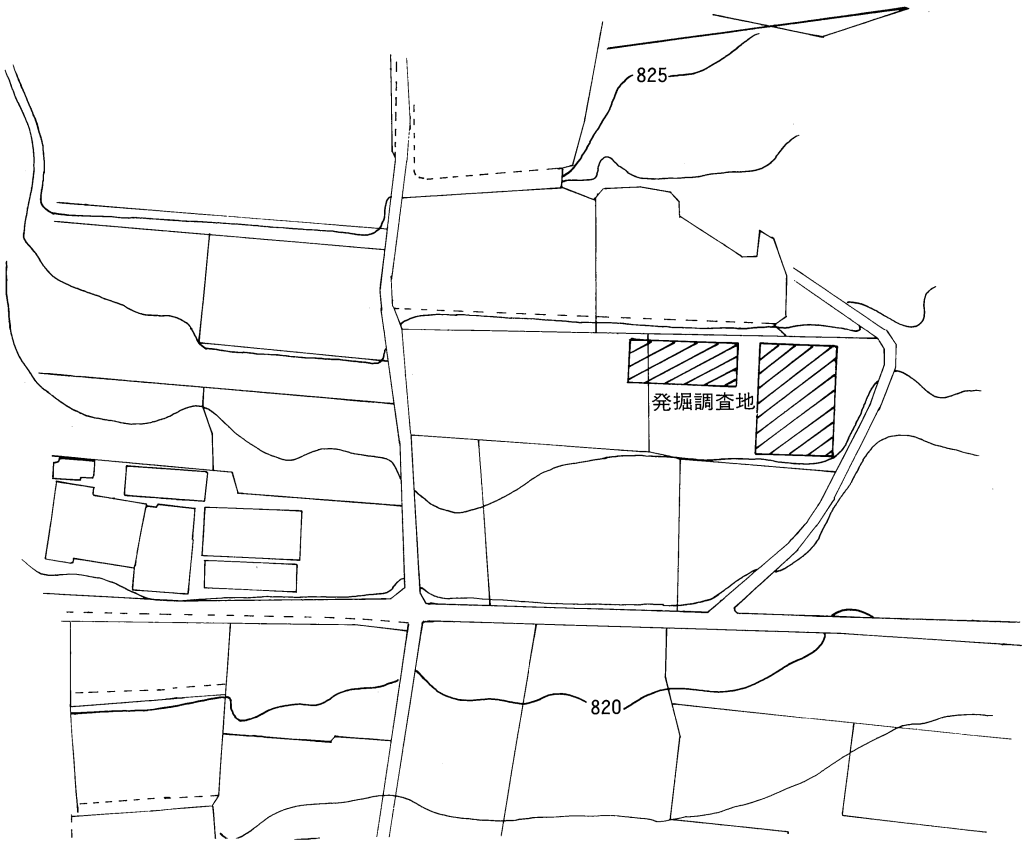
第3図　周辺遺跡分布図

狐塚古墳状況

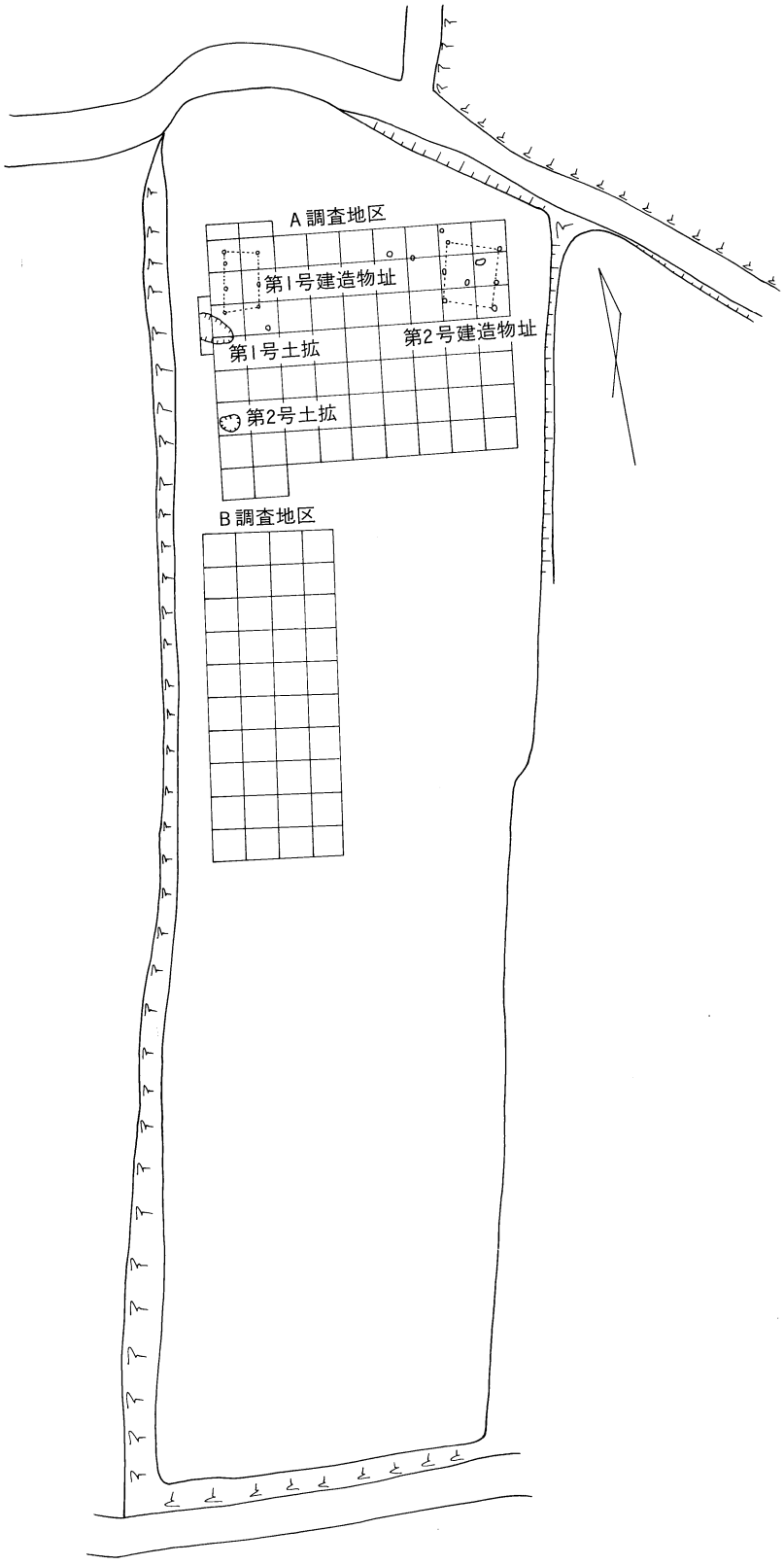
第Ⅲ章　発掘調査の結果

第１節　調査結果の概要

中曽根地区における土地改良事業に伴い、緊急発掘調査が必要となり、今年春より調査の計画を進めた。10月末に調査予定地区をブルトーザーにより表土を平均30～40㎝排土する。調査地区を二つに分け、北寄りの広い部分をＡ調査区、南側をＢ調査区とする。Ａ調査区東北の角よりグリッドごとに発掘を開始したところ、いくつかの柱穴状の落込みが発見された。ここに東西に一本、南北に一本地層を観察する為のベルトを残す。発掘面積が広くなるにつれ、北西の角にも同じような柱穴状の落込みが発見された。北西の角に発見された部分の精査の結果、７柱穴よりなる掘立建造物址であろうと予想し、これを第１号建造物址とする。同じように東北の角に発見された遺構を第２号建造物址とする。これ等の遺構の調査時に遺物の出土がほとんどなく時代の予想が困難であったが、表面採集では、灰釉陶器片をかなり見ることができた。それ等のものから推測し、平安時代の遺構と考える。又、他にも土拡が二ヶ所検出されている。Ｂ調査地区からは遺構、遺物共にほとんど出土は見られなかった。



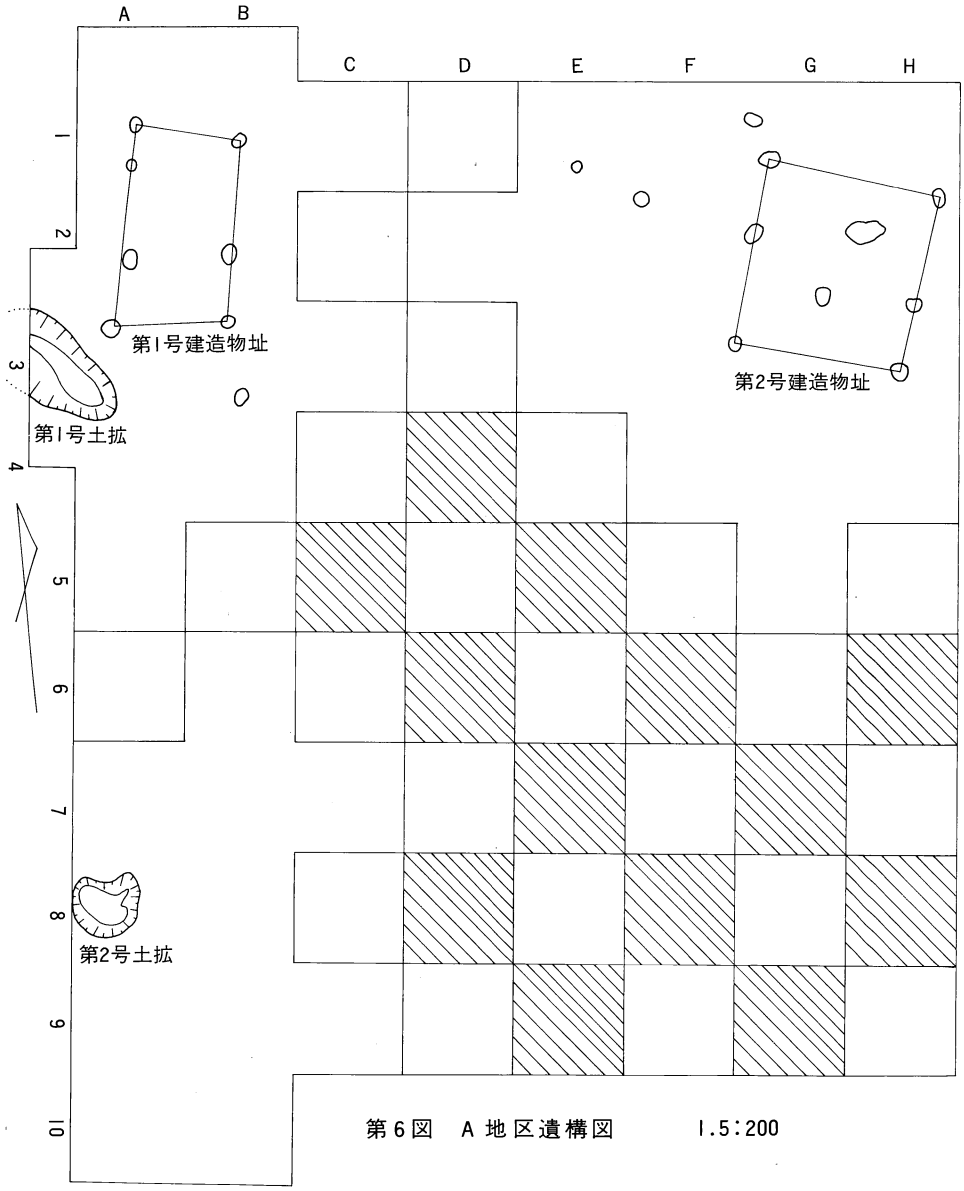
第４図　地形図及び発掘区域図



第5図　遺構全測図

第2節　遺　　構

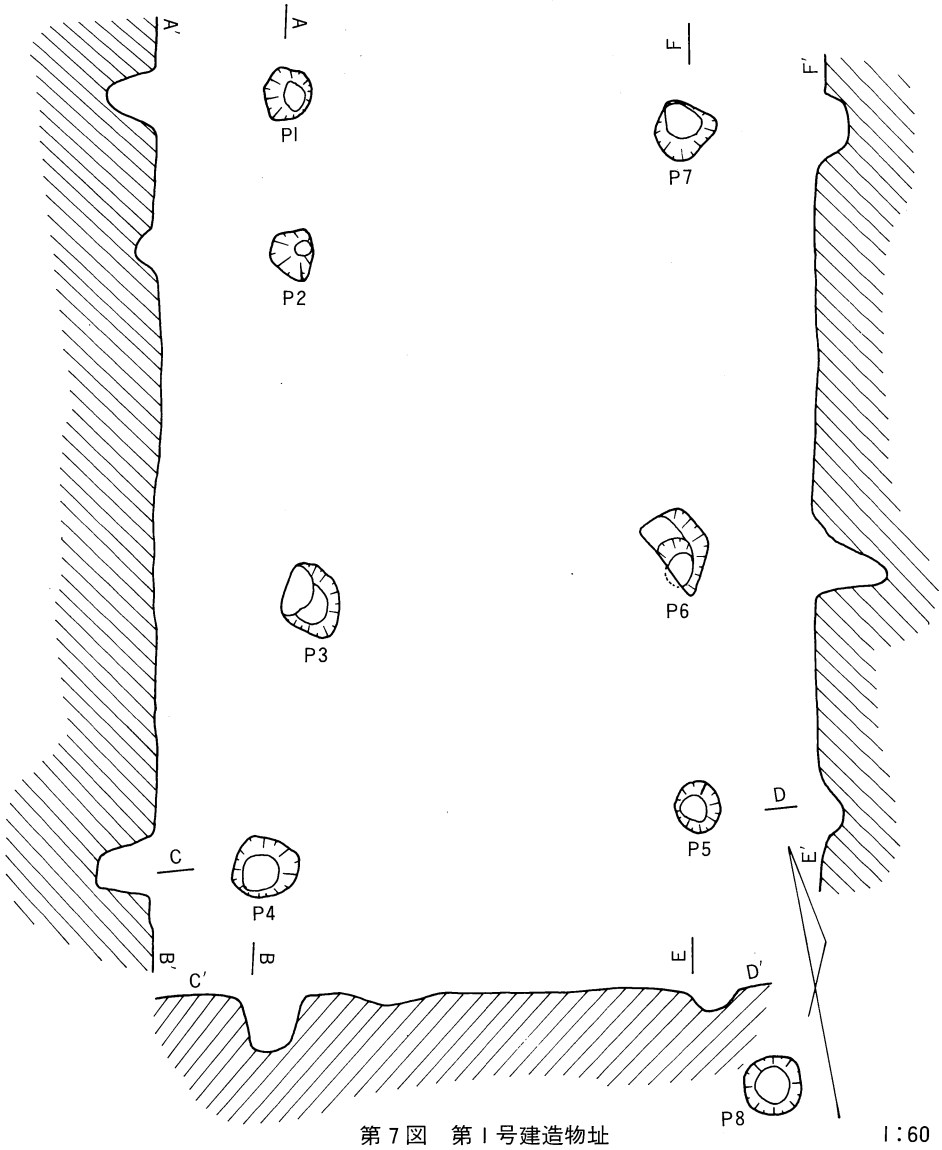
1.　建造物址



第6図　A地区遺構図　　1.5:200

(1)　第1号建造物址（第7図）

A調査地区A_1、A_2グリットに発見された本遺構は7柱穴で構成されている。柱穴の大きさ深さは一定せず、直径で22㎝から30㎝、深さは落込み確認面より12㎝から36㎝と差がある。柱穴配列は南北に長く、西側に4柱穴、東側に3柱穴がそれぞれほぼ直線に並んでいる。西側の列P_2に対する柱穴が検出されなかったが、これは柱が短かく第四層まで達しなかった為に検出されなかったのであろう。南北の長辺は3ｍ70㎝東西1ｍ85㎝となっている。これは尺に直すと12尺と9尺になり2間と1間の大きさになる。又、東側列の南にP_8が検出されている。これは建造物補強用



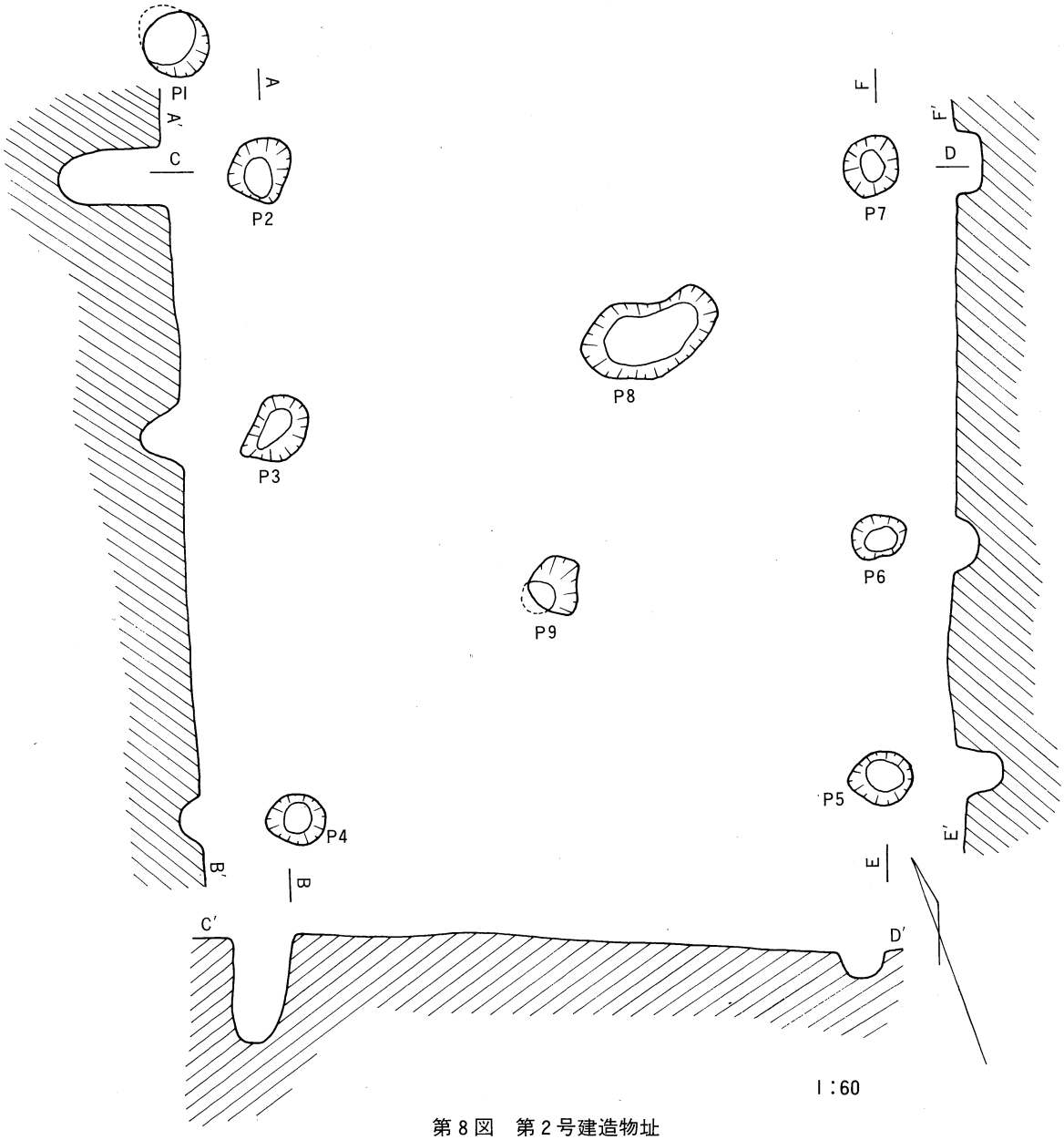
第７図　第１号建造物址　　１:60

の柱穴址と考えられるのではないか。遺構調査時は遺物が全く検出されなかった。しかし表面採集では一帯から灰釉陶器片が多く、この時期の遺構であろうと推測する。遺構面の標高821.64ｍで遺構の長軸が真北より10°東に振れている。

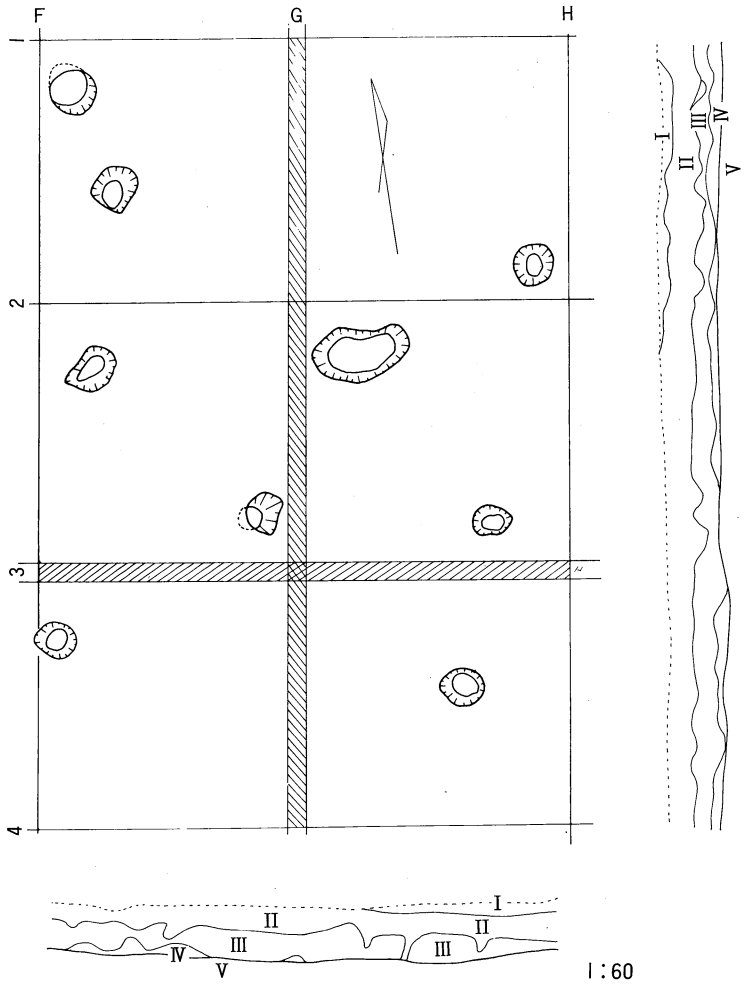
(2)　第２号建造物址（第９図）

本遺構はＡ調査地区G_2、G_3グリットを中心に発見された。第一号建造物址より９ｍ東寄りである。遺構は一例が３柱穴よりなる二列で構成されている。プランは南北が３ｍ40cm、東西が３ｍでほぼ正方形に近い。柱穴の大きさは直径30cm前後に一定している。深さはP_2だけが54cmときわめて深く他は12cmから24cmの間である。他にも３ヶ所のピットがあり、P_1は55cmと深く、それも

傾斜した穴で建造物のつっかい棒ではないかと考えられる。P_8、P_9は床面を下から補強した側柱でも立てたのであろうか。これも第一号の建造物と同じ時代の遺構と思う。そして使用した目的も倉庫的な地上建造物であろう。遺構面の標高は821.14ｍで、第一号址より50cm低くなっている。南北の長軸線は真北より21度東に振れている。



第８図　第２号建造物址



1：60

層序説明（第２号建造物址）

第Ⅰ層　〔耕作土〕水田を作った時の置土で、いろいろな土が混入している。

第Ⅱ層　〔黒褐色土〕粒子が小さく、石などほとんど混入していない。

第Ⅲ層　〔茶褐色土〕茶色の強い褐色土である。

第Ⅳ層　〔黄褐色土〕ロームに近い黄褐色土である。

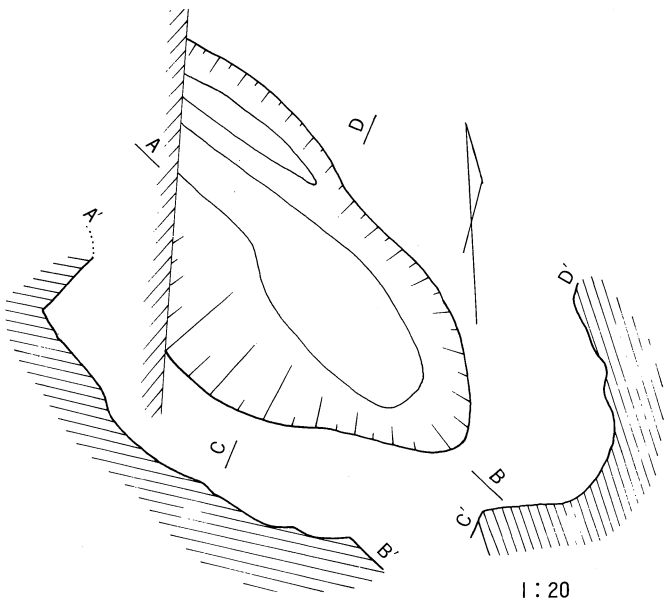
第Ⅴ層　〔ローム〕ローム層

第９図　第２号建造物址地層図

2.　土　　拡

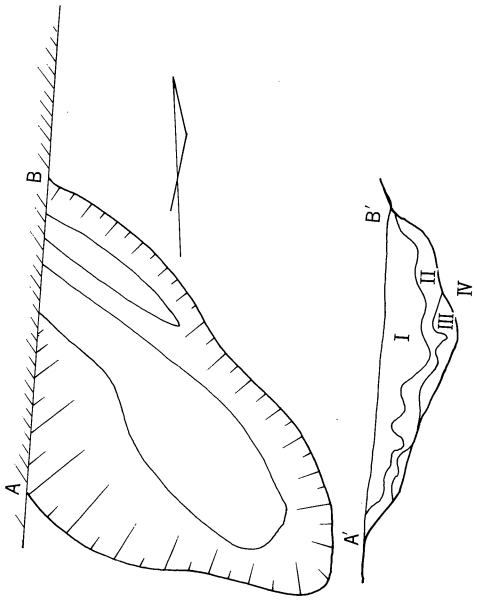
(1)　第一号土拡（第10図）

A_3グリットに発見されたこの遺構は、西側に張り出しているので80㎝拡張した。それでもなお完掘はできず全遺構の状態を調査するまでには至らなかった。遺構は図に見るように舟底型になっており、中の土層は三段になっている。出土遺物は全くない為時代決定は困難である。形から埋葬に使った土拡という推定もできる。



1：20

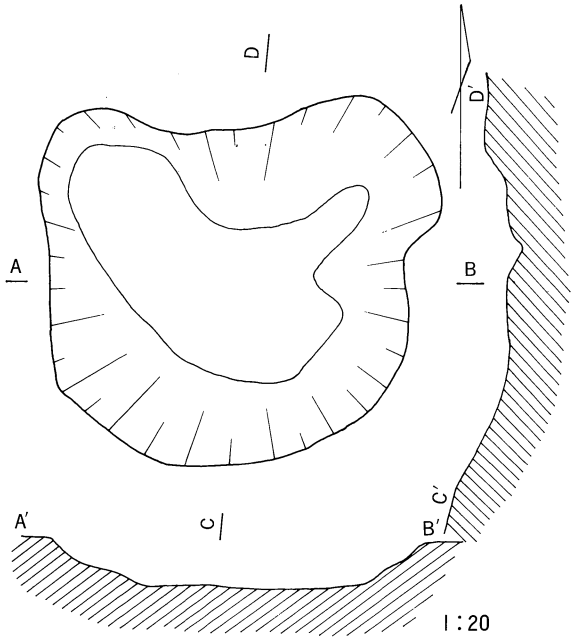
第10図　第１号土拡実測図



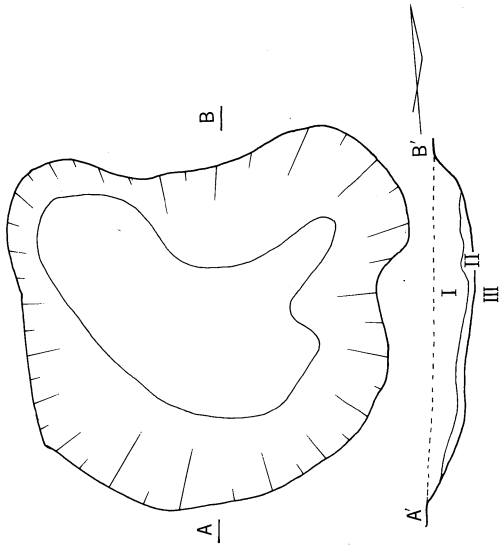
第11図　第１号土拡地層図

層序説明（第１号土拡）

第Ⅰ層　〔耕作土〕黒褐色土で小石が混入している。
第Ⅱ層　〔黒褐色土〕Ⅰ層によく似ており粒子が細かい。
第Ⅲ層　〔茶褐色土〕黒土がブロック状に混入している。
第Ⅳ層　〔ローム〕Ⅲ層とⅣ層ははっきり分けられる。
　　Ⅳ層上面は少し叩きになっているため。



第12図　第２号土拡実測図



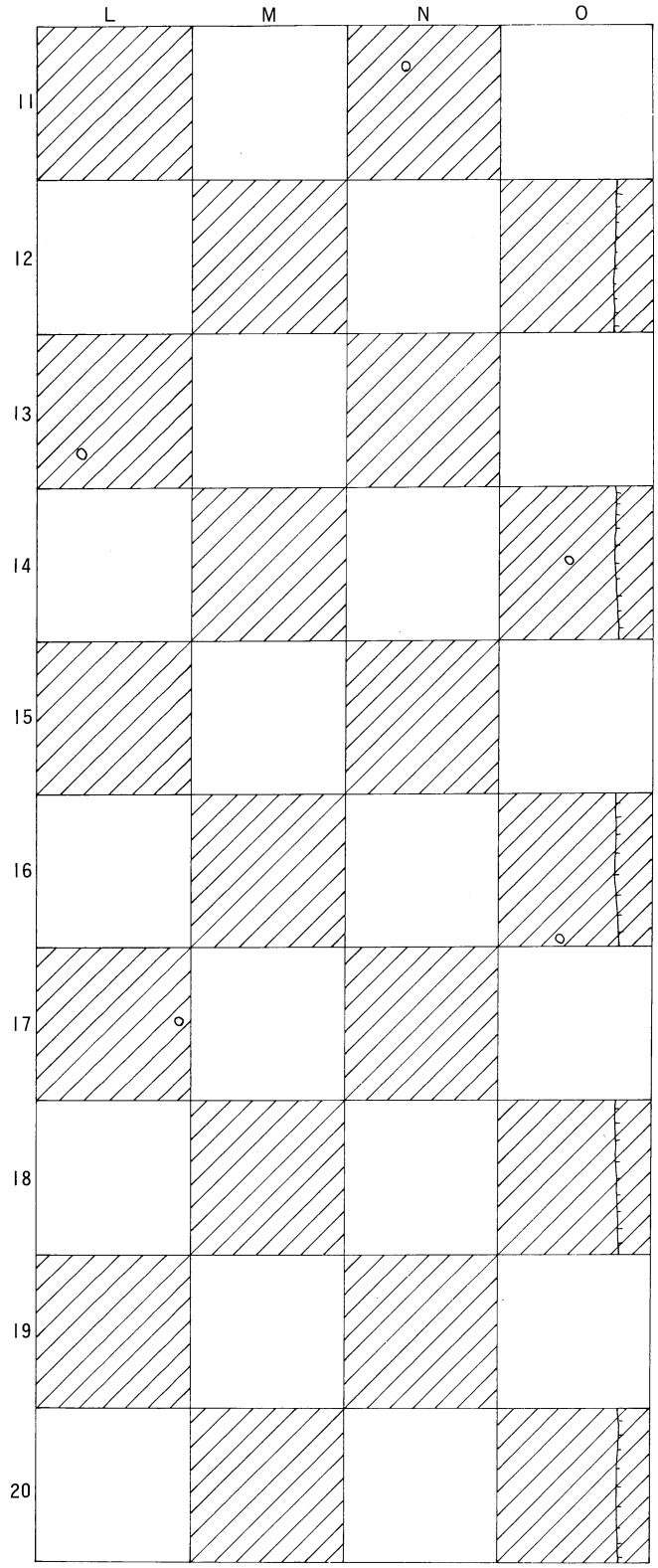
第13図　第２号土拡地層図

層序説明（第二号土拡）

第Ⅰ層　〔黒　土〕
第Ⅱ層　〔褐色土〕ローム、黒土が混入している。
第Ⅲ層　〔ローム〕

(2)　第二号土拡（第12図）

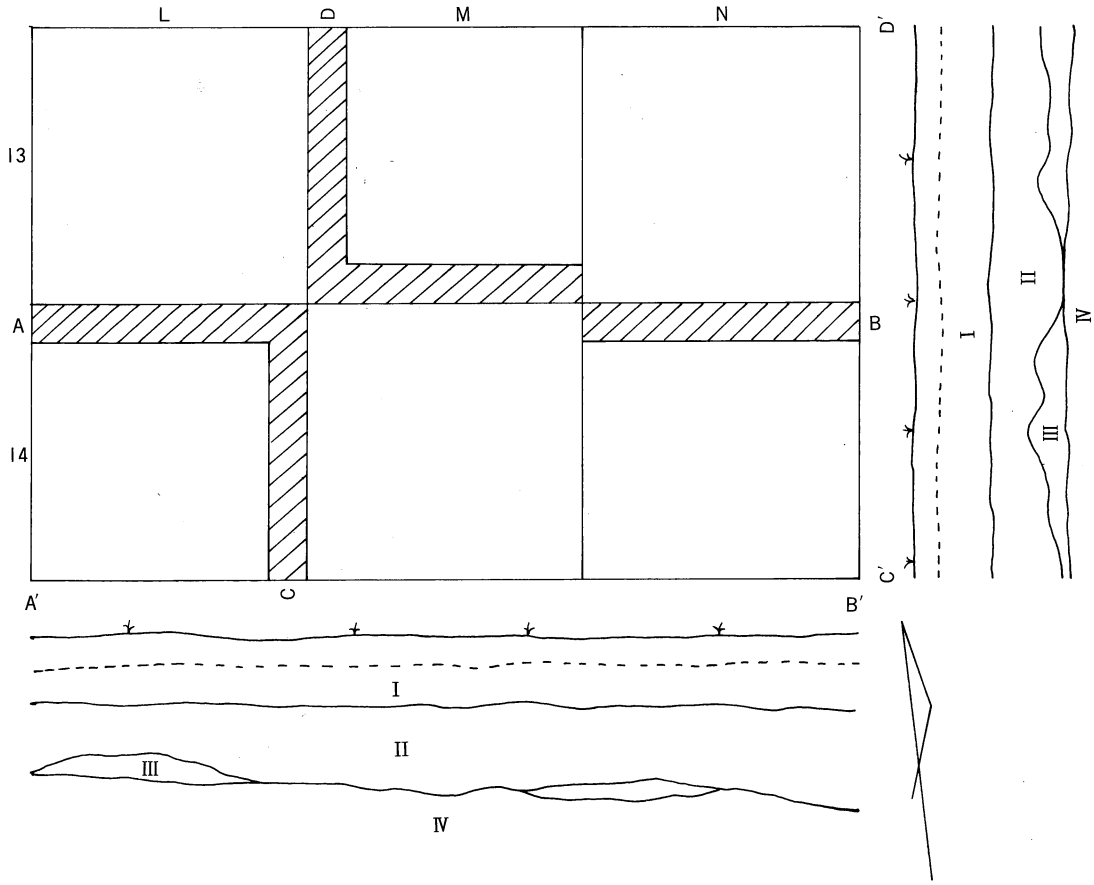
A_7 および A_8 グリットにかけて発見された土拡である。図に見るごとく不整円形を呈し、深さは28㎝とそれ程深くない。土拡内部も一号土拡ほど堅くしてなく、伴出遺物もないため使用目的も推測し難い。



第14図　B地区発掘調査図

B調査区発掘

A調査区南に東西4グリット、南北10グリットの計40グリットを設定する。第一層の耕作土を20cm前後ブルトーザーで排土をする。L—11グリッドよりチドリに調査を始める。この畑は大正年代に水田に作り変えた時期があったそうで表土より30cm前後の位置に非常に堅い平らな面が出ている。これは水田の地場でありこの面には小石が多い。その為地場の上の土は完全に移動しており、時々出土した小片土器も周辺のものが水田にする作業事にまぎれて入ったものと思える。この地場を掘り進むと旧地層があり、11—L、11—N、14—Oなどには小ピット状の落込みが何か所か発見された。これ等のピットは人為的な様子が少くなく、又、配列に規則性もない為、A地区のような建造物址的な遺構にはならなかった。又、O列東寄りには南北に数センチ前後の落込み列が発見されている。これは水田造成中か、それ以前の地割りの関係によるものと思える。このB地区はA地区より少し高くローム層までが浅くなっている。この周辺にA地区より検出された二つの建造物址に平行する住居址の発見を期待したが発見するまでには至らなかった。



第15図　B地区地層断面図

層序説明

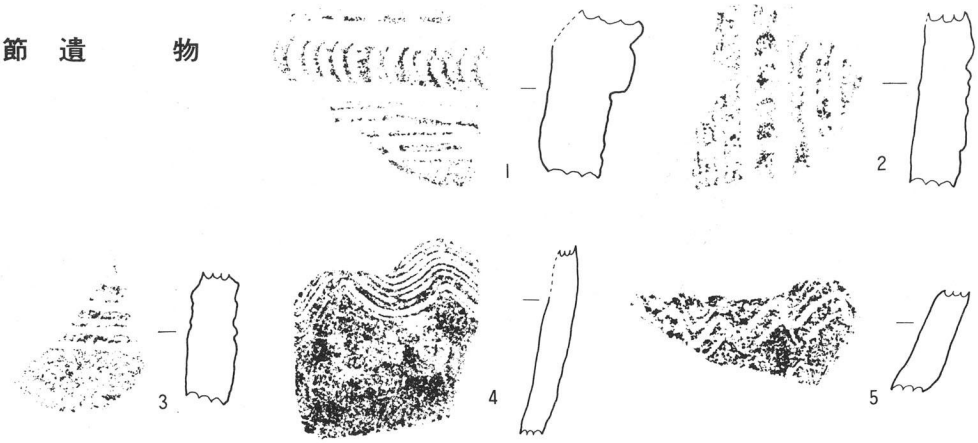
第Ⅰ層　耕　作　土　黒褐色土でⅠ層の下部は小石が多く田にしていたころの地場である。

第Ⅱ層　黒褐色土層　きめの細かな土でⅡ層上部はとても堅く小石が多い。粘土がまじっている。

第Ⅲ層　茶褐色土層　ロームがまじった茶褐色土

第Ⅳ層　ロ　ー　ム　層　青味がかったロームでネバネバしている。

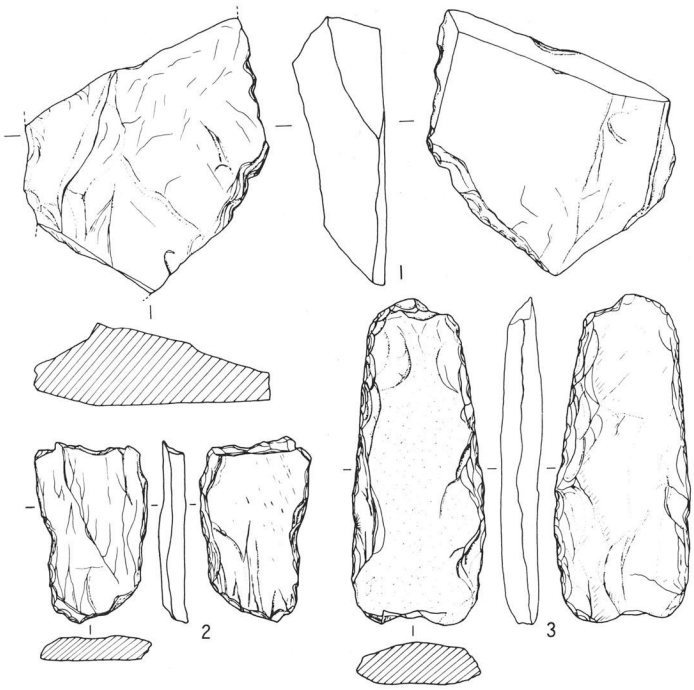
第3節　遺　　物



第16図　土　器　拓　影

1.　土　　器（第16図）

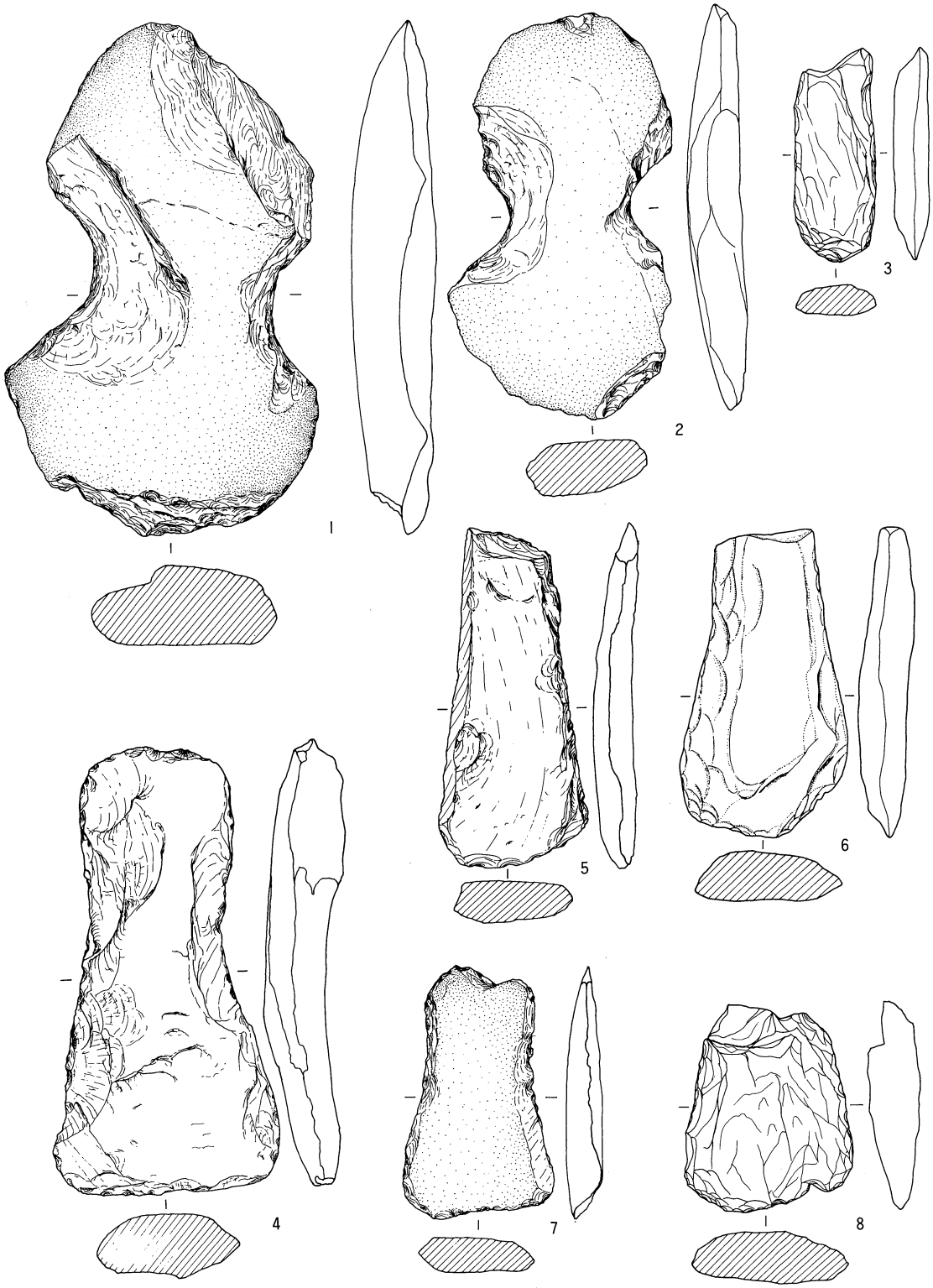
出土した土器片は少量であるが、大別すると、縄文時代中期初頭の時期、弥生時代後半の時期、平安時代の土器の三つに分けられる。第16図１・２・３は縄文時代中期初頭の土器片で、この時期の特徴である半裁竹管を多く使用して文様を付けている。胎土中に石英と雲母を多く含み、焼成は良好である。４・５は弥生時代後半のもので二つ共に頸部から肩にかけての部分であり、波状文が施されている。胎土は精製した良質なものである。他に須恵器が１片出土している。又、調査地区集辺からは灰釉陶器の坏口縁部が採集されている。



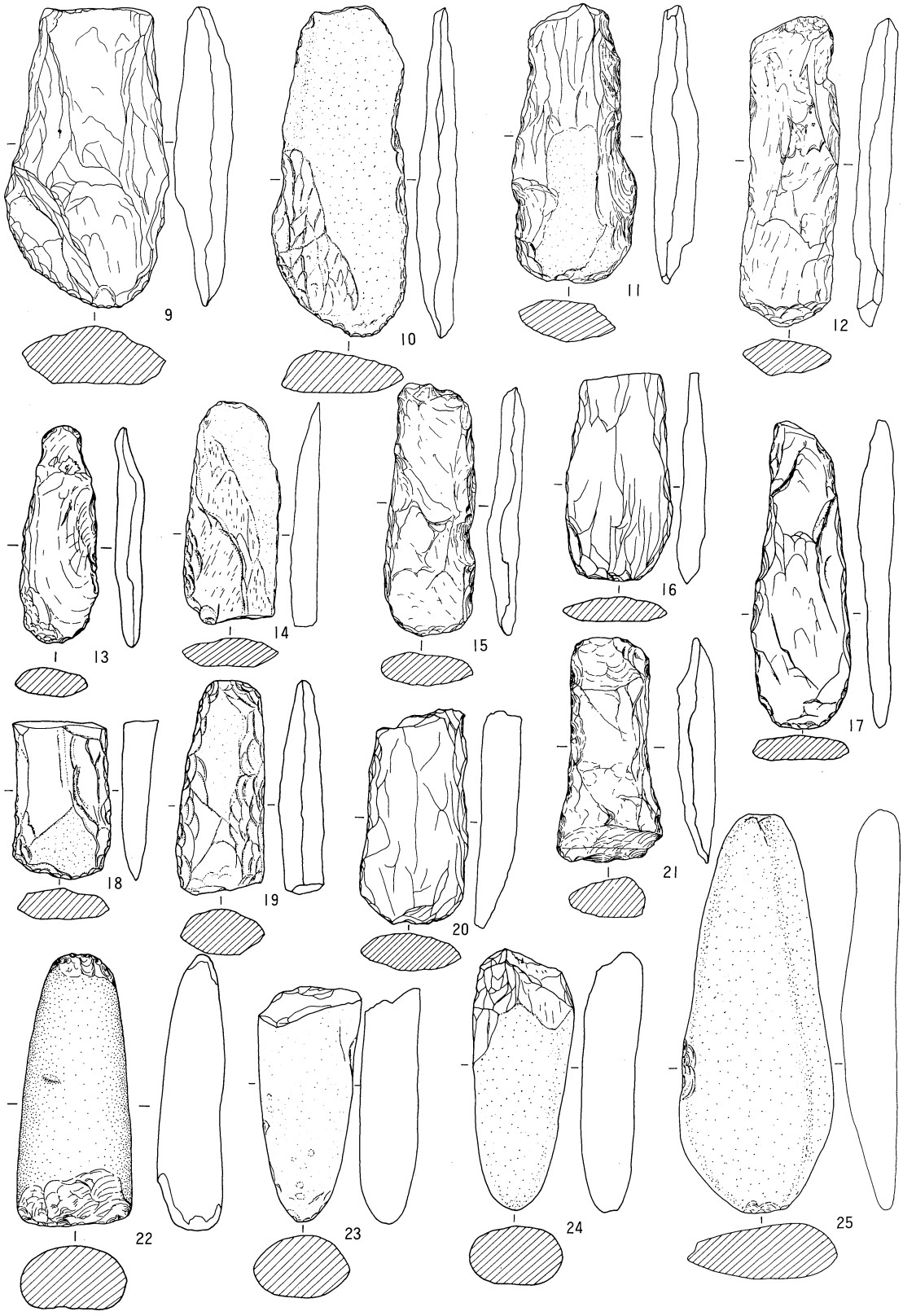
第17図　石　器　実　測　図

2.　石　　器（第17図）

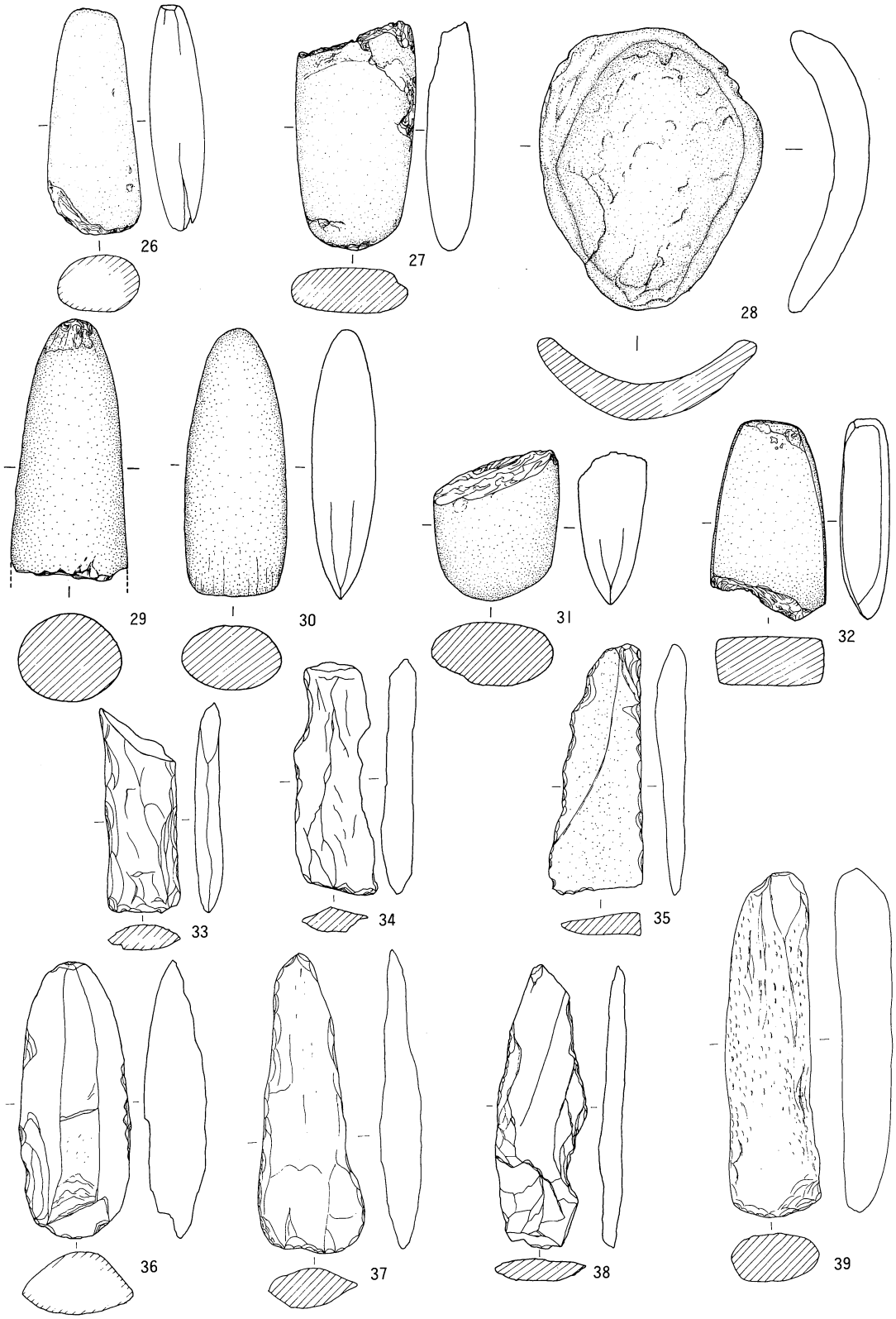
石器の出土は３点である。第17図(1)はＡ調査地区F_2グリットの第Ⅲ層よりの出土である。母石の芯を利用して作っている。上部の半分と刃部の一部が欠損している。砂岩質の大型の打製石斧である。(2)はＢ調査地区K_{15}グリットからの出土で小型で粘板岩の石斧である。上部半分が欠損している。(3)はＢ調査地区M_{13}グリットの出土で、母石の外側を利用して作った打製石斧である。両側辺に細かな調整を行ない形を整えている。周辺遺跡から出土する石斧はこの形態のものが最も多い。石質は砂岩である。



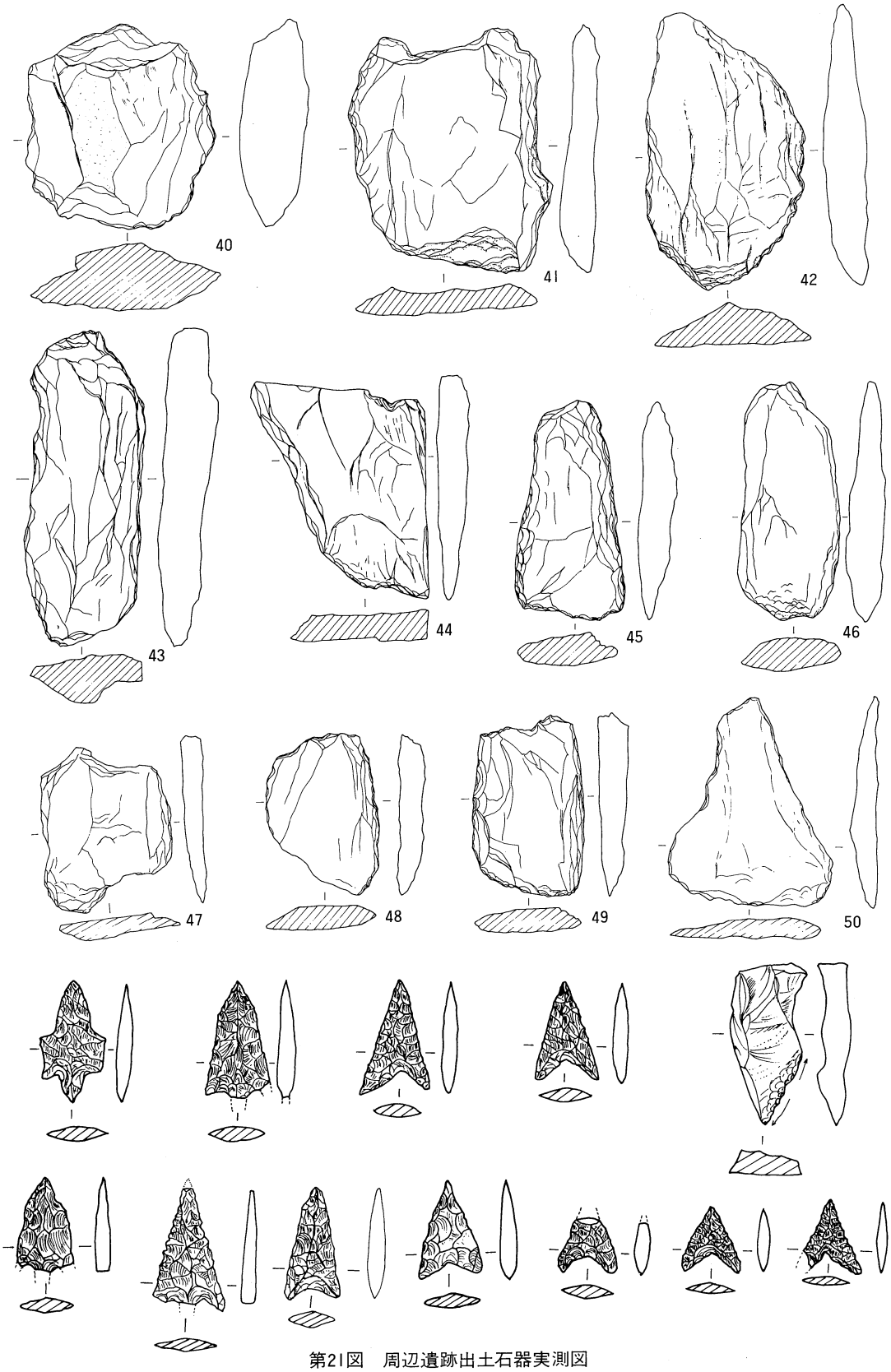
第18図　周辺遺跡出土石器実測図



第19図　周辺遺跡出土石器実測図



第20図　周辺遺跡出土石器実測図



第21図　周辺遺跡出土石器実測図

第22図　大久保遺跡ポイント

第23図　大久保遺跡出土土器

周辺遺跡の出土遺物について

中曽根北遺跡の周辺遺跡として最も近くにある二遺跡につき、周辺を踏査した結果多くの石器類を採集することができたので、以前に採集された資料と合せて参考遺物として照会することとした。中曽根北遺跡のすぐ西側に続く富田大久保遺跡は以前より多くの打製石斧や、縄文式土器を出土している。第20図、第21図は大久保遺跡を中心とした富田内の遺跡から採集したものである。砂岩質の打製石斧が多いが、製作は細部にまで手を加え形を整えている。短冊型のものが多い。第20図30～32の石器は全体を丹念に磨き刃部は両刃でするどい角度に研ぎ上げている。又、自然石を利用した棒状の石斧も採集された。第23図に見るように大久保遺跡からは縄文時代中期の大きな（高さ66㎝）甕が出土している。これは家の新築時の基礎工事中に出土したものである。同じく大久保遺跡からは第22図に示したポイントが出土している。 これは長さ6.5㎝の大きさで両面を丹念に調整し両縁辺も鋭い刃状になっている。このポイントは箕輪町内全体的にみても類例の少ない貴重なものである。この大久保遺跡は今後十分注意しなければならない。

もう一ヶ所、中曽根北遺跡の北側、帯無川に添って東西に長く一の宮遺跡がある。第18図、第19図に示したような各種の石斧を出土している。経ヶ岳山塊の山麓附近に立地する遺跡としては最大と思われる。第18図１・２に見るような大型の分銅型石斧や同図４のような石斧等その出土量はきわめて多い。この一の宮遺跡からは長さ１ｍ余りのすばらしい石棒も出土している。これ等の石器はほとんど砂岩質のものが多く帯無川の河原石を利用したものであろう。

第Ⅳ章　ま　と　め

中曽根北遺跡は箕輪町西部の山麓附近に立地する遺跡の一つで、過去において縄文時代の石器や平安時代の遺物が採集されている。一帯は大泉川と帯無川による扇状地形が形成されており、遺跡は扇央部やや上位に位置している。ここは県営畑地帯総合土地改良事業により埋蔵文化財包地が破壊されるため、それに先立ち緊急発掘調査を行ない記録保存を行なったのである。調査の過程や歴史的環境等において把握した所見と問題点を記してまとめとしたい。

1.　本遺跡の遺構と規模

土地改良事業の関係上、本遺跡の任意の地点を選定して発掘したため、必ずしも遺跡の中心部を調査したかは疑問であるが、調査面積は約800㎡であり、その内に建造物址２棟、土拡２ヶ所、他に柱穴状のピットが何ヶ所か見られた。検出された建造物址のうち一つはプランが３ｍ70㎝×１ｍ85㎝で、これは現在の２間×１間の大きさである。当時における建物の長さの単位等において研究しなければならない問題である。発見された土拡のうち、一つは土拡墓のように考えられるが、完掘できなかったので全体のプランを検討できず残念であった。建造物址は地上倉庫的建物と予想するが、そうした場合、この建造物を使用していた人々の住居址が附近にあると思われる。調査もそれを予想し、期待して進めたが、住居址の確認にまでは至らなかった。しかし遺跡一帯からは、須恵、灰釉等の遺物が散見できるところから、住居址が附近に存在することは十分考えられる。

2.　生活基盤

次に本遺跡の自然環境と生活基盤についてであるが、扇央部やや上位に位置する遺跡一帯は、東に向ってゆるやかな傾斜面である。大泉川と帯無川のほぼ中央に位置し、川まで１㎞と遠いのでこの両河川の利用は考えられない。遺跡の上方に富田部落があり、そこから樅木川という小河川が流下して本遺跡のすぐ南を通過してる。この川の水を利用したものと考える。現在においても一帯は水の少ない地域で、水の確保には苦労している。そのため生活基盤を水田に求めることは考えられず、畑作とか、山林に依存した生活と考えるのが妥当であろう。

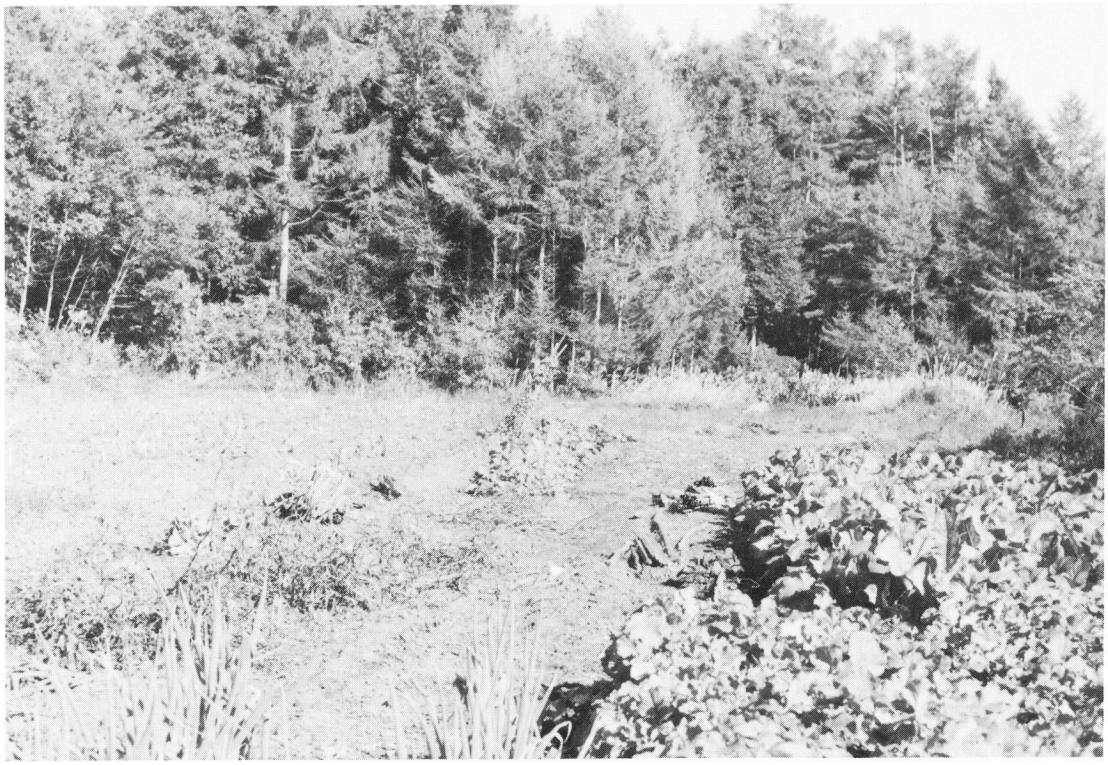
3.　歴史的環境

本遺跡の周辺には多数の埋蔵文化財包蔵地が存在している。当遺跡に最も近い富田大久保遺跡と一の宮遺跡は西部山麓地帯を代表するものである。大久保遺跡においては町内でも数少ない旧石器時代末のポイントを出土しており、山麓一帯の歴史を一万年の昔にまで下げたのである。縄文時代、平安時代においても多くの遺物を出土し、今後に多くの問題を投げかけている。一の宮遺跡も同様複数の時代を経た遺跡で、規模は西部山麓地帯では最大である。遺物出土量も非常に多く比較的保存状況の良い遺跡で、このまま後世に伝えたいものである。又、この山麓は延喜の古道と呼ばれる東山道の道すじという説もあり、一帯の平安時代の遺跡や古墳などと合せて考えなければならない。

中曽根北遺跡は発掘範囲で見る限り平安時代に形成された集落の片鱗が姿を現したものと見ることができる。その時期は僅かに伴った灰釉陶器の破片からみて十世紀前後の頃と思われる。この時期には上伊那の地に突如として大集落が形成される現象が見られる。前述の一の宮遺跡、中道遺跡、北城遺跡などはこの例である。それと同時に灰釉陶器を使用して生活した人々が、天竜川の河岸段丘上から次第に木曽、赤石山脈の山麓や渓谷に進出していく気配を濃厚に漂せている。この情勢は平安時代の上伊那の歴史的な興隆を窺わせるに十分であり今後具体的に解明しなければならない大きな課題である。当遺跡はこのような解明に良い資料として十分役立つであろう。

（柴　登巳夫・林　茂樹）

図　　版



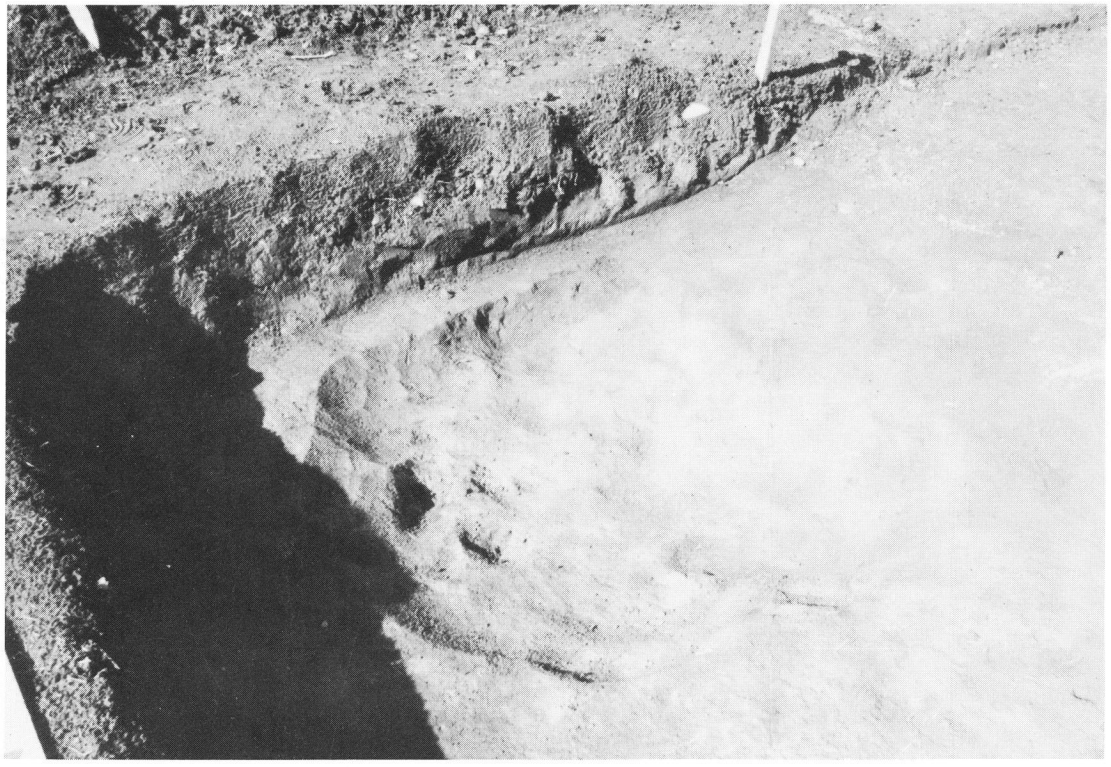
遺 跡 近 景

A 地 区 全 景

第 1 号建造物址

第 2 号建造物址

第 1 号 土 拡

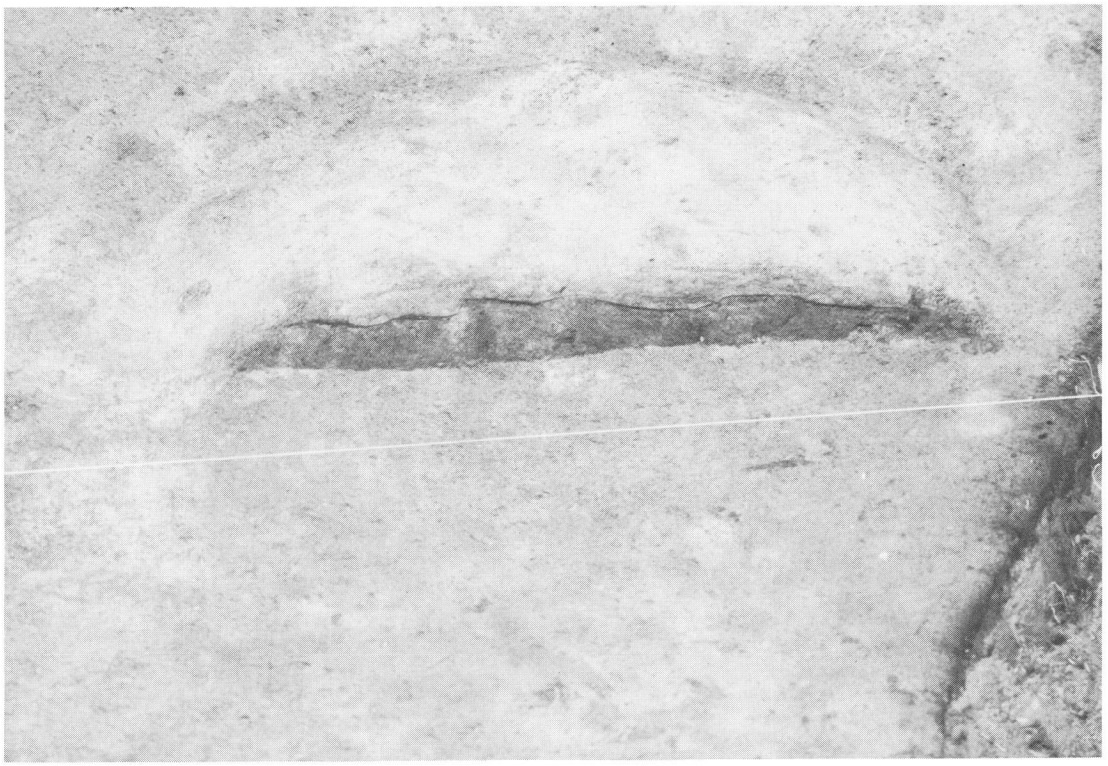


第 2 号 土 拡

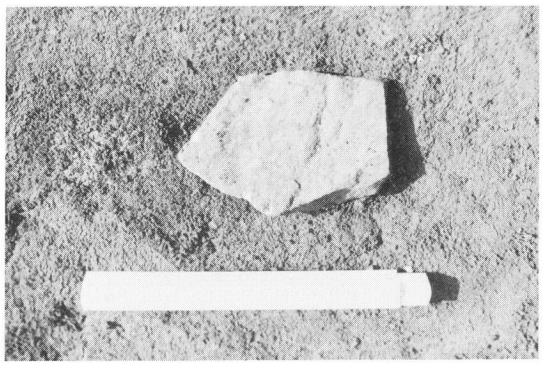
グリット発掘状況

B地区グリット発掘状況

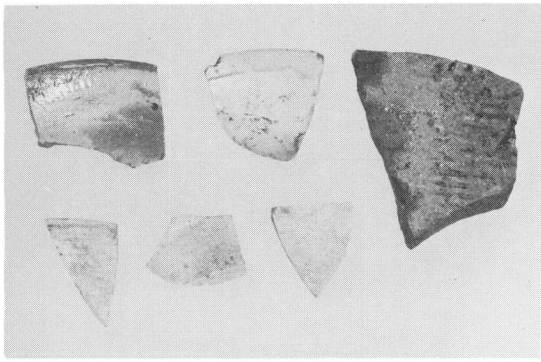
地　層　状　況



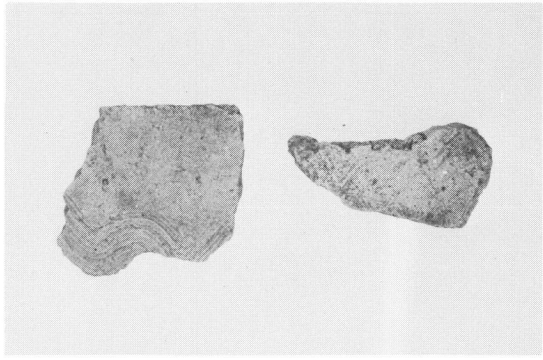
第 2 号土拡地層状況



遺物出土状況



出土遺物



調査風景

中曽根北遺跡

〜〜緊急発掘調査報告書〜〜

昭和55年３月31日　印刷
昭和55年３月31日　発行

発行所　長野県箕輪町教育委員会

印刷所　伊那市　小松総合印刷㈱